

光栄の森

昭和59年11月 毎月4日発行 第77号
発行所 光栄プロテック 湯井

11月にむかって

代表取締役 三田雅憲

日一日と寒さが増し少しずつ紅葉も深まる今日この頃です。社員、家族の皆様も秋を満喫されていることと思います。

今月は法隆寺の宮大工であり一流の職人である西岡常一の祖父 西岡常石の育成方法から職人とはどういうものかという部分を少し学びたいと思います。(まだまだ年季の浅い社員が多い当社にとって少しでも参考になれば幸いです。)

常一は見習いの時から、祖父 常石に厳しく仕込まれました。まず、普通は大工としての基本である道具の研ぎ方を仕込まれるのですが、常石はそれを一切教えず、常一が身体で覚えるまで毎晩のように道具を研ぎ続けさせました。後年常一は「頭で覚えたものはすぐに忘れてしまう。身体に覚えこませようとしたんでしょ。」と述懐し、その大切さを「手が覚えることが大事なことです。教えなければ子どもは必死で考えます。考えるより先に教えてしまうから身につかん。今の学校教育が忘れていないことやないですか。」と述べています。

また、「おじいさんがびっちり仕込んでくれたんです。とにかく厳しかったです。口笛は吹いてはならんとか、半纏の帯はきちんと結べとか。だらしのないはいかんのです。」といった生活態度や、法隆寺は皇族などの賓客が来るという理由から礼儀作法なども厳しく教えられました。常石はまず見本を示し、あとは一切教えず自分自身で何回も試行錯誤させて覚えさせる方法をとったのでした。厳しく叱責することもありましたが評価するのも上手く、直接本人を褒めずに母親に「常一は偉いやつや。わしが言わん先にこういうことをしようだ。」といいます。母親は喜んで私に話してくれます。つまり間接的に褒めるのです。

唯一の内弟子である小川三夫が西岡常一棟梁のことを次のように述べています。

弟子に入るとき「一年間はラジオも聞かなくて良い。テレビもいらない。新聞も読まなくて良い。大工の本も何も読む必要はない。ただひたすら刃物を研げ。」と言うのが棟梁の言葉でした。後にわかりますが、修業はそうやってただただ浸りきることが大事なのです。寝ても覚めてもそのことしか考えない時期をつくることです。親方のすることや考え方を学びとることだから理屈はいらない。そこで一緒に暮らすことの大事さもわかりました。ひたすら打ち込むことの大事さも身についたと思います。これができなかつたら一人前にはなれなかつた。職人の家には職人の家の音だとか言葉づかいとか歩き方とか身のこなし、雰囲気があります。主だけがそうなのではなく家全体にそういうものがあり、そこで育った子どもはそういうことを知らず知らず身につけています。

私見ですが、学校や本よりも生活こそが一番の勉強であると思います。生活の中でしつけでも挨拶でも身につけるものなのです。そして相手を思いやること、日常のあらゆる動作の中にある無駄な動きを省く工夫も日々の生活の中から身につけていくものだと思うのです。

光栄プロテックを一つの家だと考えるとこのことがより生きてくのではないかと思います。私たちは「教えてもらってません。聞いてません。」と大口を述べて自分の不勉強を他人のせいにしがちですが、自分自身が考えて先達の仕事を身体に沁みこませてゆくことの大切さを学んで生きていきたいものです。